

子ども観に関する研究

田中理絵

A Study on the View of Childhood

Rie TANAKA

(Received October 1, 2004)

はじめに

本稿が示そうとするのは、現代日本における「子ども観」の世代間差異の諸相について、なかでも「昔の子どもに比べて今の子どもは変わった」というイメージの内実についてである。

子ども観とは、主に、大人が子どもをどういう存在であると見なしているかという視線である。子ども観は、「いつの時代であっても変わらない子ども本来の性質」といった子どもの本性に関するものだけでなく、社会や文化の変化のなかで変わるものも含めて多層的に成り立っている。たとえば、現在、各答申を貫いて社会問題化している「子どもの逸脱行動の凶悪化・低年齢化」は、1997年春に神戸で起きた「酒鬼薔薇事件」以降、「これまでの子ども観では今の子どもの〈心〉を把握することはできない。子どもは変わってきた」という心象を人々に強烈に植え付け、少年法の改正を含めて社会制度・体制の変容を促す動機となった。

実際、「子どもがおかしい」、「子どもらしくない悲惨な事件が増加している。その原因は何か」、「子どもたちの心で何が起きているのか」といった問いは、その都度、社会的言説を生み出し、その一部は繰り返し唱えられることで強化されている。たとえば、少年の非行・犯罪に関する意識調査の結果を掲載した『警察白書』（平成14年版）によると、「少年の非行・犯罪は増えている」と答えたものは54.6%、「悪質化している」と考えるものは63.4%であり、その原因としては「しつけ・親子問題」が73.3%と最も多かった。間違いなく家族機能は低下しており、それは改善の見込みがない。だから、少年非行は増え続け、しかも悪質化していくだろうと人びとは予測を立てる。そして、こうした言説が繰り返し表明されるなかで強化され、擬似環境化し、やがて人びとは無批判にその言説を受け入れていくことになる。こうして「家族機能の低下」と「それによる子どもの問題行動の深刻化」は社会的現実となる。それはまた情報化の目まぐるしい進展のなかでさらに加速していく。

「家族機能の低下」や「子どもの問題行動の原因としての家族状況」の実態や真偽はさておき、以上のように、人々は常識的な見方に則って子どもを見て、その本性を予見し、行為するものである。とすると、私たちが物事を判断するリソースにはイメージといった要素がかなりのウェイトを占めるのではないだろうか。換言すると、子ども問題に対するわれわれの見解の根拠はイメージによるところが大きいのではないだろうか。それならば、人びとが無批判に抱いている「子ども」に纏わるイメージについて明らかにすることが必要となるであろう。

1. 「子ども観」研究の方法

1-1. 課題設定

ところで、われわれは誰もが「子ども」という存在について何らかの心象を抱くことができ、それを口に出して語ることもできる。これは、「子ども」というものが一心的な現象であれ、目に見える具体的形象であれ—われわれの日常生活になじみ深く結びついているためである。こうした「子ども」という社会的表象をある境界で切り取る作業が「子ども観」であり、その境界は、個々人の経験と社会的・文化的要因の3者がそれぞれ相互に作用しあって設定されるものである。だから「子ども観」研究とは、第1に、人々が「子ども」という存在をどのようなラインで境界設定 (boundary setting) するのが妥当であると考えerのかを知り、第2にその内実について調べるということになるだろう。

ただし、社会や文化だけでなく時代が異なれば、「子どもらしさ」や子ども期も異なってくる。あるいは、同じ人物であっても、社会・文化の変容の影響を受けながら一生のうちに様々な経験を蓄積していくなかで子ども観は変容していくことになる。したがって、「子ども」について語る時も、再=現前化 (re-presentation) されたものは常に変容の過程にあると考えなければならぬ。しかし通常、そうしたことは意識されにくい。それは、社会のなかで、支配的で常識的な「子ども」に関する語彙範疇が存在しているため、子どもらしさのイメージ・内実も容易に変化するとは思えないためである。したがって、基本的には、個人的経験と社会的・文化的経験の蓄積の差が—大まかに言えば世代間格差が—、各人に対してどのような子ども観を抱かせるかを大きく規定・制限することになる。しかし同時に、世代差があっても、同じ時代を生きていれば、類似した「子ども」に関する常識的見方によって人々は拘束されるものである。

本稿では、これらの諸点を意識しながら、現代社会における「子ども」観のなかでも、①「子ども」期とはいつか、②「子どもらしさ」とは何か、③昔の子どもと今の子どもは変わったのか、④子どもの成長・発達観に関する人々のイメージについて、世代別にその傾向を捉えることを具体的課題に設定しよう。

1-2. 調査方法と調査期間およびサンプル構成

本稿で用いるデータは、福岡県内において都市圏を構成している中核都市と周辺の郊外地域を対象とした層化二段階抽出法によってサンプリングしたものである。一市二町 (市街部 K 市と農村部 Tan 町、Tac 町) の各『選挙人名簿』(いずれも平成15年6月現在) から合計2,503人を抽出し、平成15年7月から8月にかけて郵送法による調査を実施した。

有効回答票は1,349票で、回収率は53.9%であった。ただし、回収率については世代間で差異が見られ、高年世代ほど、母集団比率に対して回収率は高くなっている (表0参照)。なお本文中では、20-39歳を若年世代、40-59歳を中年世代、60歳以上を高年世代と便宜的に区分して世代間差異を考察している。

2. 子ども期の特徴

(1) 「子ども期」とはいつか

ところで、そもそも人びとが「子ども」をイメージするとき、それは何歳から何歳ぐらいまでなのであるだろうか。

表0 母集団および回収率の年齢構成

	母 集 団		回 収 票		
	人数(人)	比率(%)	人数(人)	比率(%)	有効比率(%)
20-29歳	37,720	17.8	129	9.6	9.7
30-39歳	36,604	17.3	152	11.3	11.5
40-49歳	33,213	15.7	210	15.6	15.8
50-59歳	38,597	18.3	293	21.6	22.2
60-69歳	30,827	14.6	281	20.8	21.2
70歳以上	34,504	16.3	260	19.3	19.6
不明・無回答	—	—	24	1.8	—
合 計	211,465	100.0	1,349	100.0	100.0

注) 母集団は(社)国土地理協会『住民基本台帳人口要覧』(平成15年版)を参考に作成。

表1は、何歳から「子ども」であると思うかについて尋ねた結果である。世代ごとに子ども期のはじまる年齢の平均を比較すると、20～30歳代は2.15歳、40～50歳代が2.79歳、60代以上で3.43歳から子ども期がはじまると考えており、若年世代ほどより早期から子ども時代がはじまると認識していることがわかる。特に、0歳時から「子ども」期がはじまると答えている者は、高年世代で14.9%なのに対して若年世代で34.0%と高いように、若い世代ほど、まだ自我の芽生えもない時点であっても「子どもは子どもである」と考える傾向があることも特徴的である。

表1 何歳から「子ども」か (％)

	0歳から	1～3歳	4～6歳	7歳以上	計	平均(歳)
20～30歳代／若年世代	34.0	44.7	17.7	3.5	100.0 (272)	2.15
40～50歳代／中年世代	29.5	35.0	28.3	7.1	100.0 (505)	2.79
60代以上／高年世代	14.9	37.5	35.1	12.5	100.0 (550)	3.43
計	24.5	38.1	28.9	8.6	100.0 (1,337)	2.91

()内は実数。無回答・不明を除く。以下同様。
p < .000

「何歳までが子どもか」という質問に対しては、表2にみるように、平均で、若年世代では14.3歳、中年世代で14.4歳、高年世代で13.2歳と、概ね14歳前後が子ども期のおわりであると考えられている。また、高年世代ほどより早く子ども期が終わると認識している。したがって、子ども期の平均期間は、20～30歳代は12.17年間、40～50歳代が11.61年間、60代以上で9.81年間というように、若い世代ほど子ども期をより長く捉えているようである。

次に、こうした子ども期のなかでも最も「子どもらしい子ども期」について尋ねた(表3)。若年世代では幼児期が最も多く、世代が上がるに連れてその年齢は若干上がっていき、高年世代では小学校低学年ぐらいが最も子どもらしい時期であると考えている。

表2 「子ども」は何歳までか

(%)

	0～12歳	13～15歳	16～18歳	19歳以上	計	平均 (歳)
20～30歳代／若年世代	42.6	28.4	18.4	10.6	100.0 (272)	14.32
40～50歳代／中年世代	40.2	31.9	18.4	9.5	100.0 (505)	14.40
60代以上／高年世代	51.1	27.8	10.9	10.2	100.0 (550)	13.24
計	45.2	29.5	15.3	10.0	100.0 (1, 337)	13.92

p = .002

表3 一番「子どもらしい」のはいつ頃だと思いますか。

(%)

	誕生後入 園前まで	幼稚園児 くらい	小学校 低学年	小学校 高学年	中学生	高校生	その他	計
若年世代	9.6	44.7	40.4	3.9	0.4	—	1.1	100.0 (282)
中年世代	12.9	33.3	47.4	4.2	1.4	0.2	0.6	100.0 (504)
高年世代	12.2	28.4	50.9	5.1	0.9	0.4	2.2	100.0 (550)
計	11.9	33.7	47.4	4.5	1.0	0.2	1.4	100.0 (1, 336)

p <.000

(2) 子どもらしさの指標

以上のように、「子どもらしい時期」を答えることができるのは、人々の頭のなかで子どもらしさを規定する何らかのイメージが存在するためである。それでは、子どもらしさを示すキーワードとはどういった性質のものなのだろうか。その結果を示したのが表4である。

いずれの世代においても最も多かった回答は、「いちばん無邪気で純粋な時期」であった。2番目に多かった回答（「いちばん元気でよく遊ぶ時期」とポイント差が平均で30%と大きいことから、「無邪気」「純粋」が子どもらしさを強く規定する指標であるといえるだろう。次いで、「いちばん明るく大らかな時期」「いちばん真面目で素直な時期」「大人に甘えて頼りにする時期」と続き、「元気」「明るい」「素直」「甘え」という性質も子どもらしさを表す要素となっている。反対に、子どもらしさを表す言葉として選択されにくかったのは、「礼儀正しい」「自主的に活動」「勉強をよくする」であった。

ただし、各項目を世代別に細かく見ていくと、若年世代で2番目に高かった「いちばん元気でよく遊ぶ時期」（若年世代で50.4%）は、回答者の年齢が上がるにつれて減少していき、高年世代では27.5%である。一方で、高年世代で2番目に多かった「いちばん真面目で素直な時期」（高年世代で36.7%）という回答は若年世代では14.2%しかなく、被選択順位も5番目となっているなど、子どもらしさを示すキーワードの強度は世代間で異なる。

しかし大きくまとめれば、若年世代ほど「無邪気」「元気」といった純粋性を子どもらしさの指標と見ており、世代が上がるほど、「真面目で素直」「大人や先生の言うことを聞く」といった従順性を重視する傾向が指摘できるだろう。この結果は、次の表5の結果とも合致しており、より世代があがるほど、子どもは大人の言うことを聞くべきであるという子育て観にもつながっている。また、子ども期が「無邪気」「元気」「素直」といった自由闊達なイメージを多分に含

表4 「子どもらしさ」の特徴

(%)

	若年世代/ 20, 30歳代	中年世代/ 40, 50歳代	高年世代/ 60歳代以上	計	
いちばん無邪気で純粋な時期	78.7	70.8	60.5	68.3	***
いちばん元気でよく遊ぶ時期	50.4	44.6	27.5	38.8	***
いちばん明るく大らかな時期	27.3	32.3	32.0	31.1	
いちばん真面目で素直な時期	14.2	18.5	36.7	25.1	***
大人に甘えて頼りにする時期	20.2	22.4	16.7	19.6	
大人の言うことを一番聞く時期	8.9	16.7	21.1	16.8	***
先生の言うことを一番聞く時期	10.3	10.7	23.1	15.7	***
いちばん優しく穏やかな時期	6.4	5.2	8.9	7.0	*
仲間とグループを作る時期	8.5	4.0	5.8	5.7	*
いちばん礼儀正しくする時期	2.1	5.8	7.1	5.5	**
いちばん自主的に活動する時期	8.9	3.4	2.0	4.0	***
いちばんよく勉強する時期	1.8	1.2	1.8	1.6	
計：人)	282	504	550	1,336	

***p<.001 **p<.01 *p<.05 以下同様

表5 大人と仲間のどちらの言うことを優先するか

(%)

	子どもだから、仲間の言うことよりも親や先生の言うことをよく聞くべきだ	子どもだから、大人のいうことよりも仲間の言うことの方を優先するのは当然だ	計
20-30歳代／若年世代	76.6	23.4	100.0 (274)
40-50歳代／中年世代	86.7	13.3	100.0 (475)
60代以上／高年世代	90.2	9.8	100.0 (521)
計	86.0	14.0	100.0 (1,270)

p < .000

むものであっても、表5のように、子ども期にあっては大人の保護・庇護下で教育やしつけを受けるべきであるという期待がいずれの世代においても優勢であることにも注意をしなければならないだろう。

3. 子どもは変わったか

(1) 今と昔の子どものイメージの比較

次に、「子どもが変わってきた」という言説について、昔の子どもと今の子どものイメージの相違から、その内容を明らかにしておきたい。先に述べたように、「子ども観」は自己の経験と社会、文化の3要素が相互作用しながら形成されるものであるから、経験の差が「子ども観」の差異につながるだろうと考えられる。そこで、今の子どもと昔の子どものイメージについて世代間に分けて調査を行った(表6)⁽¹⁾。

表6 今の子どもと昔の子どものイメージ比較

	今の子ども					昔の子ども				
	若年 世代	中年 世代	高年 世代	計		若年 世代	中年 世代	高年 世代	計	
忍耐力がなく我慢が出来ない	87.3	91.0	92.5	90.8	*	12.6	4.6	6.5	7.1	***
衝動的行動が多く目先の利害で行動する	88.3	86.2	84.7	86.1		21.7	13.5	12.1	14.7	***
自己中心的である	79.7	87.6	87.5	85.9	***	19.4	10.5	9.2	11.9	***
社会道徳や規範意識に欠ける	80.7	81.3	82.1	81.5		13.1	8.1	8.9	9.5	*
子どもは何を考えているかわからない	77.2	79.8	84.0	80.9	**	14.9	10.7	18.0	14.5	***
基本的なマナーが出来てなく生活態度が悪い	74.2	78.2	84.1	79.7	***	9.5	7.9	12.1	9.9	*
知識が豊富	78.0	79.7	80.4	79.6		30.6	23.3	38.8	31.1	***
自分の気持ちを他人にうまく伝えられない	79.9	77.5	78.5	78.4		37.0	54.7	54.7	50.9	***
物怖じしないで行動する	64.2	78.1	84.2	77.6	***	49.5	30.8	47.5	41.5	***
口先ばかりで実行しない	58.6	68.8	74.2	68.7	***	19.0	10.1	5.5	10.1	***
興味・関心が広い	57.0	61.0	76.5	66.4	***	71.1	57.1	67.2	64.2	***
仲間意識が薄く、連帯感がない	56.4	66.2	68.5	65.0	***	3.6	2.6	7.6	4.8	***
素直である	44.3	40.0	39.2	40.6		87.7	91.8	95.4	92.4	***
友だちつきあいが上手だ	28.4	33.3	46.1	37.5	***	78.7	80.2	83.8	81.3	
親切で思いやりがある	37.3	30.9	26.9	30.7	**	81.3	83.6	90.2	85.8	***

今の子どもの特徴を抽出すると、忍耐力がなく我慢が出来ず（90.8%；以下、括弧内%）、衝動的行動が多く目先の利害で行動し（86.1）、自己中心的であって（85.9）、社会道徳や規範といったモラルに欠け（81.5）、「何を考えているかわからない」（80.9）存在である。また、知識は豊富だが（79.6）、口先ばかりで実行力が伴わず（68.7）、人間関係を築くことが下手である。

それに比べて昔の子どもは、素直で（92.4）、親切で思いやりがあり（85.8）、友だちつきあいが上手（81.3）であった。しかも、社会道徳や規範を身につけ、忍耐力や我慢することを知っていたし、自己中心的な行動は慎まれ、連帯・忍耐・道徳といった公共性の礎となる要素を習得していたと認識されている。特に注目したいのが、年代が上がるほど、「今の子どもは何を考えているかわからない」と、現代の子どもを得体の知れないものと感じている傾向が見られる点であり、また全体で80%以上の人々がそう感じている点である。

(2) 子どもの変化と環境の変化

このように子どもが悪化してきた原因はどこにあると考えているのであろうか。表7は、子どもの主な生活場面として「家族」「学校」「地域社会」「社会全体」の4つをとりあげ、子ども問題の原因の所在について尋ねた結果をまとめたものである。

4つの場面いずれの数値も高いことから、現代の子どもの変化の背景には、家族・学校・地域社会・社会全体のすべての変容が要因として考えられていることがわかる。その主な特徴を抽出すると、若年世代および中年世代といった子育て期にある世代は、家族の問題をより厳しく感じており、また、自身の子育て期にはマスメディアが現在ほど多様に出現していなかった高年世代は、現在の子どもの発達環境の問題としてマスメディアの影響を他の世代より有意に

表7 今の子どもたちの発達環境に関するイメージ (％)

	若年世代/ 20, 30歳代	中年世代/ 40, 50歳代	高年世代/ 60歳代以上	計	
親が子どもに干渉しすぎたり甘やかしすぎる	96.4	97.4	88.6	93.6	***
親子の会話はコミュニケーションが少ない	87.8	87.5	81.4	85.1	***
親が自己中心的である	86.6	84.6	73.3	80.5	***
学校の先生と子どもたちの関係が薄れている	75.8	80.3	76.0	77.6	
学校の授業が進学中心の勉強になっている	73.0	81.1	87.8	82.1	***
地域での活動や行事に無関心な大人が多い	87.1	88.9	81.3	85.4	***
地域の大人が子どもに無関心	78.1	79.8	76.0	77.9	
子どもたちの遊び場が少ない	85.3	75.9	74.2	77.2	***
社会全般の規範が低下している	96.0	96.8	94.2	95.6	
社会全般に心の豊かさや思いやりが失われている	92.8	97.2	94.5	95.2	**
テレビや漫画等から子どもが悪影響を受けている	74.2	88.0	94.7	87.8	***

※パーセントの数値は「はい」と答えた人の数値を示す。

意識していることがうかがえる。

このように、子どもの発達に関しては、家族・学校・地域社会・社会全体の複合的な作用が問われるのだが、しかしそのなかでも、子どもの成長・発達に最も影響を及ぼすのは家族であると80%以上の人を選択している（表8）。

表8 子どもの成長発達に影響を及ぼすもの (複数回答：％)

	若年世代/ 20, 30歳代	中年世代/ 40, 50歳代	高年世代/ 60歳代以上	計	
家庭環境	80.1	79.9	80.7	80.3	
友人や仲間	46.5	45.7	39.1	43.1	*
子どもの本人の性格や資質が大きく影響する	19.1	22.1	19.1	20.2	
社会の風潮や政治などの社会環境	18.4	22.3	16.7	19.2	*
地域社会の環境	19.5	16.9	20.2	18.8	
学校生活	12.1	8.5	11.3	10.4	

次いで、「友人や仲間」「本人の性格」「社会風潮」「地域社会」の順になっているが、ポイントを見れば、圧倒的に「家族」が子どもの発達へ最も影響を及ぼすと機関であると見なされていることがうかがえる。言い換えると、「家族」が子育ての、そして子どもの人格形成の最も重要な責任者として認識されており、子どもの社会化の重要な機関 (agent) であると見なされているのである。

4. 現代社会における子育て観

このように、多くの人々が、子どもも子育て環境も変化してきたと認識しているなかで、それでは現代社会において子どもはどのように育てていくべきだと考えられているのだろうか。その結果をまとめたものが表9である（選択肢の中から2つまで回答可）。

表9 今の子どもたちはどのように育てていくべきか

(複数回答：%)

	若年世代/ 20, 30歳代	中年世代/ 40, 50歳代	高年世代/ 60歳代以上	計	
社会の決まりを守り人に迷惑を掛けない公共心をもつ	69.1	77.6	77.3	75.7	*
自分でやりがいのある仕事をする	61.0	59.7	41.8	52.6	***
社会をよりよくしていくために活動する	20.9	17.5	19.8	19.2	
社会に役立つような優れた能力をもつ	6.7	7.5	14.7	10.3	***
自分の興味・関心にしがって楽しく暮らす	17.0	8.7	7.3	9.9	***
社会や他の人びとのために働く	6.7	11.1	7.5	8.7	*
頑張って仕事をして人々の尊敬や高い評価を得る	5.0	4.0	12.7	7.8	***
社会の常識のとらわれないで自由に行動する	4.6	3.2	1.3	2.7	*

若年世代ほど「自分でやりがいのある仕事をする」「自分の興味・関心にしがって楽しく暮らす」していけるように子どもを育てるべきであると考え、個々人の人生や生活の充実・満足を重視する傾向が明らかになった。だから、若年世代ほど子どもの独創性を見極めて伸ばしていかうとする傾向がみられる(表10)。その結果、子どもの教育に惜しみない労力を注ぐようになるのであろう。

表10 独創性の育成か基礎的能力の育成か

(%)

	子どものうちから一つのことによって優れた独創的な力を伸ばす方がよい	子どものうちは一通りなんでもできる力を身につけることが大切だ	計
20-30歳代／若年世代	33.6	66.4	100.0 (277)
40-50歳代／中年世代	28.1	71.9	100.0 (495)
60代以上／高年世代	23.0	77.0	100.0 (538)
計	27.2	72.8	100.0 (1,310)

p < .005

反対に、年齢が高くなるほど、子どもを「社会で役立つような優れた能力をもつ」「頑張って仕事をして人々の尊敬や高い評価を得る」ように育てることが望ましいと考える傾向があり、個人の満足度よりも社会の一員として個々の能力を発揮して他者に認められるように努力することに価値をおいている。

こうした大きな意識格差が見られるものの、しかし、いずれの世代においても「社会の決まりを守り人に迷惑を掛けない公共心をもつ」ように子どもを育てていくことが、まず重要であると考えていることから、個々人の生活の満足度に重点を置くにしても、あるいは社会成員として役立つ喜びに重点を置くにしても、他者へ迷惑を掛けないという公共性を習得させることが最も基礎的な社会化課題であると認識していることがわかる。

より若い世代ほど、社会全体の福祉よりも個々人の生活を重視する傾向があることはこれまで論じられてきた。では、実際に子どもを注意しなければならない場面に遭遇したときにどのような対処方法の差異が見られるのであろうか。表11は、「子どもが危ない遊びをしている

のを見たとき、あなたはどうしますか」と尋ねた結果である。「注意する」がいずれの世代でも最も多かったが、やはり世代間の差も大きい。若い世代ほど、「注意する」が多数派ではあっても、「注意したいがそのまま見過ごす」「放っておく」という割合が高くなっている。

表11 子どもが危ない遊びをしているのを見たときどうしますか

	注意する	注意したいがそのまま見過ごす	放っておく	親や学校に知らせる	計
20-30歳代／若年世代	58.0	26.1	8.2	7.5	100.0 (280)
40-50歳代／中年世代	74.6	13.5	2.2	9.7	100.0 (497)
60代以上／高年世代	79.6	10.8	0.4	9.3	100.0 (538)
計	73.2	15.1	2.7	9.0	100.0 (1,315)

p = .000

先に表6で、世代が上がるほど子どもを得体の知れない存在と見なす傾向がうかがえたが、常識的に言うと、人は得体が知れないものから距離を取りたいと考えるであろうから、高年世代ほど見過ごす傾向が高くてよいはずである。しかし、実際はその相関は低い ($r = .029$, $p = .304$)。したがって、人が子どもの性質についてどのような心象を抱いているかということも大事であろうが、子どもをどのように育てるべきであるかという世代的な子育て規範もまた、実際に子どもへ対応する際に強く作用しているといえよう。

5. まとめ

以上、子ども期の境界とその内実について、主に「子どもは変わったか」というイメージに関する側面から考察してきた。そのなかで明らかになったことを箇条書き風にまとめると以下のようなになる。

- ・若年世代ほど、子ども期を長く捉える傾向がある。
- ・「子どもらしい」子ども像は、若年世代では幼稚園児ぐらいであり、高年世代になると小学校低学年ぐらいをイメージしている。
- ・「子どもらしさ」を示す指標として最も選択されたキーワードは「無邪気」「純粹」であり、次いで「元気」「明るい」「素直」「甘え」である。
- ・ただし、「子どもらしさ」を示すキーワードで重視されるものは世代間で異なる。若い世代ほど純粹性を、高年世代ほど従順性を重視する傾向がある。
- ・今の子どもと昔の子どもの性質に関するイメージを比較すると大きな相違が見られた。
- ・今の子どもは、忍耐力がなく我慢が出来ず、衝動的かつ目先の利害で行動し、自己中心的であって、社会道徳や規範といったモラルに欠ける、得体のわからない存在である。また、知識は豊富だが、口先ばかりで実行力が伴わず、人間関係を築くことが下手であると認識されている。
- ・それに比べて昔の子どもは、素直で、親切で思いやりがあり、友だちつきあいが上手であった。しかも、社会道徳や規範を身につけ、忍耐力や我慢することを知っており、連帯・忍耐・道徳といった公共性の礎となる要素を習得していたと認識されている。

- ・こうした今昔の子どもイメージの比較において、その落差が大きいのは高年世代である。言い換えると、高年世代ほど「昔の子どもはよかったが、今の子どもは問題を抱えている」とより強く認識しているようである。
- ・現代社会のなかでは、「子どもをどのように育てていくべきか」について、若い世代ほど各個人の人生を充実させるように育てていくべきであると考え（個人重視型）、世代があがるほど、社会成員として社会に役立つような能力を習得させるべきであると考え（社会重視型）。ただし、どちらにしてもそのベースとして公共性を育成させることが最も重要であると認識されている。
- ・子どもの発達に最も影響を及ぼし責任を取るべき社会化機関として、いずれの世代においても「家族」が最も多く選択されていた。

本文中でデータ結果を多用して見てきたように、現在、子ども観は大きく変容している過程にある。しかも同時代を生きていても、その子ども観は世代間で異なっており、「子どもとは」と一括りにして説明できない状況にある。

記号論者が常々論じてきたように、日常生活は世界を記号として解読することによって支えられており、イメージによって成り立っているところが大きい。たとえば、目の前にいる子どもは、他の誰でもないその子どもであるが、私たちは類似するようなタイプの子ども像を予め知っていて、そのイメージを動員して眼前の子どもを再び解釈し、見いだしていくのである。この「子ども像」とか「子ども観」というイメージは概念的に類型化されたものであり、ケネス・バーク風に「統計的な共通性」と言い換えてもよいかもしれない。とすると、子どもに関して言えば、現在、この統計的共通性の範疇が広がっていると考えられるだろう。

「子どもが変わった」「子どもが分からない」という言説が横行し、かつて当然視されていた子ども観では対応できない事態になってきたなかで、改めて子ども問題に対応するために、そして言説に巻き込まれたり近視眼的にならないように子ども問題から距離をとるためにも、私たちが子ども（問題）をどのように見なし扱っているかという「子ども観」研究が今後ますます蓄積されていく必要があると思われる。

注

- (1)本調査では、実際はどうであったかという問題を明らかにするのではなく、イメージを問題としているが、その際、過去の出来事はセピア色に染まってより良く語られる傾向があることも注意を要するであろう。

※本稿で用いたデータは、平成13-15年度科学研究費補助金・基礎研究（C）「現代日本の『子ども観』に関する実証的研究」（代表者：住田正樹）によるものである。